

ショパンピアノコンクール聴聞

日本ショパン協会常任理事・事務局長 西塚 俊一

第10回ショパンコンクールは、昨年10月1日より20日まで、ポーランドの首都ワルシャワのシンフォニーホールに於いて開催された。

このコンクールに就いては、既に音楽ジャーナリズムに何人かの方々が、報道をしているので、今更の感はないでもないが、別な立場から何か書かせて貰うことにする。その前に、このコンクールに対して、日本ショパン協会が受持っていたことを報告して置きたい。即ち、審査員として安川加寿子女史（副会長）を派遣し、また野村光一氏（会長）佐藤允彦氏（理事）が、オブザーバーとして招待された。さらにポーランド人参加ピアニストの最優秀者に友好賞（500\$）を贈ることとした。

ショパンコンクールは言う迄もなく、世界の大コンクールとして、5年毎に開催され、その権威と伝統を誇っているものだが、その入賞者はそのまま世界の楽壇に受け入れられている。古くはオポーリン、ヤコブ・ザーク、また第6回のポリーニ、次にアルゲリッチ等である。そして日本からは幸いにして、中村絃子（4位）内田光子（2位）、今回海老彰子さんが第5位に入賞している。

今度の第10回に対して、日本ショパン協会は国内よりの参加派遣オーディションを行い、2名を参加させた。うち1名は1次予選を通過したのみに止まったが、必ずしも無意味だったと思っていない。従ってこの行事は次回もやりたいと思っている。

さらに協会は、毎回50名のショパン愛好家による視察ツアーを組織して、見学旅行を行っており、勿論今回もこれを組織した。今回は特に、このツアーの中に音楽大学のピアノ科教授、また国内のコンクールの審査員の方々が参加しておられた。これ等の方々の実感を私は後述したいのである。

実は、私はヨーロッパの各地を廻って、第2次予選から聴くことになったのだが、シンフォニーホールに出かけていったら、日本人の或る若い男性ピアニストとぼったり逢った。彼は残念ながら1次で落選し、意気阻喪してはいたが、つくづく次の言葉を課したのである。

「参加して初めて解ったが、私は、とても参加する資格はなかった。テクニックも、ショパンの理解度も」

さらに言葉を続けて

「こうして外国で聴いて見ると、日本人の演奏は全部同じに聞える。そして平板だ。」

さらに彼は、結論として

「日本だけで勉強しては絶対に駄目だと思います。」

これ等の言葉は、或は常識的なことで、今更と思われるかも知れないが、実感として、これを感じたということは、私は重大なものをもって思うのである。この実感の中に、様々に発展してゆく問題が包含されてはいまいか。私は、この若いピアニストは本当に正直で、客観性をもって自分をみつめていると感じ入ったのである。

ちなみに、日本人の参加ピアニストは24名、そして入賞者は1名である。ソ連は3名受けて3名共入賞、ポーランドですら国内予選をやって6名、そして1名入賞である。但し、日本は1次予選で9名通過したので、成績は良い方かも知れないが、何か自分の技術について客観性というか、判断が先生共に正しくないのではないか、或は参加することに意義があるという例のセオリーからであるのか、つまりショパンコンクールという、世界の大コンクールへの認識が甘いのではあるまいかと思うのである。

今回の視察団の中には、前述したように日本の国内コンクールの審査員の方とか、音楽大学の教授の方が沢山居られ、全くフレッシュな感動と共に色々なことを学びとることが出来たといっておられたが、その中の1つに個性と演奏の本質の問題がある。

「只弾けばいいというものではないな」

こんな解り切った簡単な言葉が、思わず洩れたというのである。

そうかといって、私共は、日本は全々駄目だとは決して思ってはいない。今一歩だ。この次は、という触覚はしかとあるのである。

ここで、私は海老彰子さんに讃辞を呈したい。2次・3次予選時の海老さんの演奏は素晴らしいもので、それは優勝の可能性を充分に感じさせるものがあったが、本選のピアノ協奏曲の演奏中に、まるで魔が差したようなミスがあったことは、何んとも惜しんでも余りあるものであった。日本ショパン協会は、今年度の協会賞を贈って、その労の幾分か報ゆることにしたのである。

その他に、2次予選で落選はしたけれども、実力的にみて、高橋裕希子さんの演奏を忘れることは出来ない。審査員の1人であるパドラ・スコダは彼女に対して、彼女の落選は審査員のミスであるといってくれた。

The Competition

音楽教育者としての責務の重み

山岸 麗子

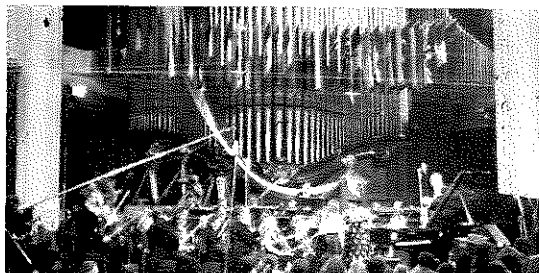
数あるピアノコンクールの中でも、ピアニストとしての本質をためす最高のコンクールといえるショパン・コンクールは、ポーランドの国家的大行事です。3週間に渡るワルシャワでの厳しい審査の全貌を、最初から1人も欠けることなく聴くことが出来たのは、私にとってかけがえのない体験でした。

一参加者について

驚いたのは、プログラムが1冊の部厚い本である事。ポーランド語とフランス語で出場者の経歴が記されており、その数は世界37カ国から180名(書類審査通過者、うち楽権31名)第1次予選は1週間続き、そのヘッドスケジュールに、審査の先生方のお疲れは如何ばかり、と思いやられました。参加国は、アメリカから34名、次いで日本の25名、フランス14名、イギリス11名、イタリア8名、西ドイツ7名、ポーランド6名…。特筆すべきは中国勢の日ごましい進出ぶり。9名の応募者がそれぞれ好演、1次入選者43名中、中国は6名残っていました。更にアメリカ、フランスの4名に比べ、日本が9名という最高の入選者を出し、「ショパンコンクールを東洋人にさらわれる」というニュースまで流れる始末。しかし、喜びも束の間2次の結果は、中国は台湾からの1名日本も海老彰子さんを残すのみとなってしまいました。

一演奏について

第1次予選は玉石混淆といったところで基本的な技術もまだ充分でないと思われるものも、かなりありました。2次は曲目も多く、ノクターン、バラード、ポロネ



舞台の海老彰子さん

ーズ、エチュード、プレリュードと変化に富み、大変興味深く聴くことが出来ました。ここで3次出場者は15名にしぼられたわけですが、さすが国際コンクールならではの心に残る演奏も多く、アンコールの止まぬ時も何回もありました。

感動のシーンは、全盲のフランス人。ハンディを克服し、1次・2次とも心に滲みる演奏を聴かせてくれ、思わず胸が熱くなってしまいました。入賞には至れなかったものの、人々の感銘も一入^{ひとしほ}でした。

優勝のベトナム人が会場をうならせたのも、2次予選でのことでした。特にエチュードでは、1曲毎に嘆声がもれ、神業的な技術に会場は湧きに湧きました。彼はモスクワ音楽院の学生で、出演するコンサートでは、他の誰もがかすんでしまうという“話題の人”ということですが、彼が絶妙な演奏を披露してくれたのがこの時だけだったのが残念でした。2位のソ連の女性も、最初から群を抜くうまさで印象的でしたが、2次・3次共に、気品のある洗練された音楽と姿の美しさで、私達を楽しませてくれました。本選のコンツェルトでは、力の点で、男性が優位に立ったのは仕方ないことでしょう。

次に異色の存在として、ユーゴスラビアのことを記しておきましょう。彼は、全くユニークな“現代のショパン”ともいうべき(?)大胆な演奏をやったのけ、審査員の票は両極端に分れてしまいました。ケンケンごうごうの末、アルゲリッチが本選の審査をおけるとい一幕

楽器のデパート

塚 本 楽 器

(近江八幡支部のお世話をしております)

〒523 滋賀県近江八幡市堀上町145の6

TEL 07483-3-5198

ピアノ・エレクトーン・ステレオ

琴 光 堂 楽 器

(上田支部のお世話をしております)

〒386 上田市大手1丁目10番6号

TEL 0268-22-0551

もありました。とにかく、凄い才能の持ち主という他はないのです。1次・2次・3次とも、完璧な表現でピアノを駆使し、自由自在に強烈な自己を表現し、彼の抜けた本選はまさに興味半減でした。ショパン・コンクールとしては入賞させられない、という気持ちも分りますが、彼こそ、「まことの芸術家」という讃辞がふさわしいピアニストでしょう。22才という将来性に期待いたします。

最後に日本の海老さんも、実に立派に堂々として日本人の面目をほどこしてくれました。本選で、「止る」というハズニングさえなければ、3位内に入れたのに、と残念でなりませんでした。

一教師として思う一

自己主張はあるが技術がないものが、第1次予選で目立ちました。音楽後進国はよく頑張り、技術への挑戦はすさまじいものゆとりがなく、音楽が型にはまっています。それに比べ、ソ連は3人出場し、その3人全員が入賞。そして、1位のベトナムも、あのユーゴも、ソ連で学んでいるのです。これでは、ソ連のピアノ教育を学ばなくては…と誰しもが思うでしょう。ソ連は完全な英才教育で、幼児時代から一貫した音楽専門のエリートコースがあります。脱落者を切り捨て、最後まで残れるのはエリートのみ。このコンクールの出場者も、国内での選抜に通過し、その後各都市でリサイタルを重ね、万全の準備をして国家が送り出してきた粒よりの3人なのです。これに対し、自由の国アメリカでは、やりたいようにやっている感じで、34人の出場で、本選まで残った人はいませんでした。

日本人は「技術はよいが、音楽が型にはまっていて自己主張がない」と以前から言われています。「表現手段は一応出来たのだから、教えられたものではなく、自分自身の心から湧き出る音楽を堂々と主張してほしい」これが私達の切なる願いです。技術を身につけるには、正しい基本と真摯な努力が必要とされます。本来一体であるべき音楽(内容)と技術(手段)が分れてしまうのは、技術の困難さの証明に他ならないのですが、表に出る技術



山岸麗子氏(左)と日本の出場者赤津さん(右)

(メカニック)を急ぐ為、そのマスターが目的となり、与えられたものを演じるロボットとなってしまいがちです。ピアノの技術とは、結局は心に思った音が出せることなのですから、指の技術のみではなく、もとなる心育てて行かなければ、自分の音楽は生まれて来ません。ピアノ入門の第一歩から、どういう音を出したらよいか、どういう風に歌ったらよいかを、常に自分で考えて練習すること。この練習の積み重ねが本当に音楽する心育て、技術をも高めていくのだと思います。

ピアノの道は、本当に長い厳しい道です。そしてショパン・コンクールは別世界の出来事ではないのです。入門時の習慣がすべてを支配してしまう程、ピアノの基礎教育は大切です。これを受持つ私達、教師の責務の重大さを改めて思い知らされました。幼い芽を大切に、一步一步正しい積み重ねをしているか、心しながら育てて行きたいと思います。

趣味のクラシック音楽教室

(ピアノ・チェンバロ他)

カーネギー会

(大阪支部のお世話をしております)

〒542 大阪市南区横堀7丁目26

TEL 06-245-6364

本格派ショップ天神に誕生

日本楽芸社

(福岡支部のお世話をしております)

〒810 福岡市中央区天神2丁目6の26

TEL 092 (713) 1625

The Competition

これからのピアノ教育

松口 雍子

1980年10月2日から21日までワルシャワで催されたコンクールに出席する機会に恵まれました。参加者全員、世界のコンクール入賞者で、5年に1度の開催が参加者のレベルを高めている一因とも思われます。

1. コンクールのスケジュールは次の通りでした。

〈期間〉 〈出場者数〉 〈ポイント〉

第1次	10/2~7・180(日本25)	〔音楽性は勿論、テクニックの差がはっきりする。〕
第2次		
10/9~13・43(日本9)		〔多面的音楽性の表現が要求される。〕

第3次 10/15~16・15(日本1) [マズルカとソナタにしぼられ] 〔る。〕

最終・10/18~19 7(日本1) [コンチェルト]

受賞・10/20~21 7(日本1) [6位までコンサート]

2. 次に感じたことを列挙してみましょう。

○審査方法で良いと思ったことは、予選の点数が加算制で、例え2次が不調でも3次でとり戻せるチャンスがあるという点です。

○ショパンという限られた課題曲では、演奏者の相性が左右し、チャイコフスキーやエリザベートの上位入賞者でも、第1次予選にも残れないということがおこらうということでした。

○近くで聴くと、指の震えが見える者もわずかにいましたが、聴衆の拍手に答えて何度も舞台にもどり、にこやかにおじぎする様子は日本のコンクールでは見られない光景といえるでしょう。

○考えさせられたのは、外国語のもつイントネーションやリズム感と、平べったい日本語のそれとの差、ひいては表現力(これは国民性の影響も大きい)の違いノ

ショパンコンクールに学んだこと

—1980年12月6日帰朝報告ダイジェスト—

福田 靖子

5年前、各方面の先生方の御協力を頂いて、ピティナヤングピアニストコンペティションを創始する為に動いていた私は、日本のピアノ人口の多さとその水準の広さを改めて知り、あ然としてしまいました。この時、水準向上の為にはやはり、世界に目を開かなくては、と心に強く思いました。そして、海外に向けて努力してきましたが、今回は世界最高といわれるショパンコンクールに行ってみりました。

まず、ショパンについてお話ししましょう。彼は、1810年に生まれ、1849年にこの世を去りました。父はフランス人、母はポーランド人です。4才からピアノを始め、習ったのは短期間でした。わざわざ時間をかけてピアノを習う必要のない天性に恵まれていたのでしょう。彼は8才でピアノ協奏曲をひいています。日本では考えられない事ですが、世界には8才程度でピアノ協奏曲を弾いた例が数多くあります。幼時からの体験や場数を踏むことの大切さは、ショパンコンクールのピアノ協奏曲を聴いても痛感しました。ピアニストが交響楽団と合わせる機会が少ないせいでしょう。1人では素晴らしい演奏ができて、アンサンブルが出来なくては困ります。当然4位のはずの海老さんが、4位空席のまま、5位2名のうちの1人となったのも、協奏曲の際のハプニングに起因

しているのではないのでしょうか。

ワルシャワ音楽学校の校長ヨゼフ・エルスナー氏は、旧態依然とした従来の教育でショパンを縛りつけてはいけないと悟り、全く新しいピアノ感覚をもってショパンに接しました。1824年、彼は15才の時に作品第1 rond を初出版します。ポーランドは歴史に残る天才を生みだしている国です。私の考えでは、日本の教育の最大の欠点は天才を育てないこと。これは、あるピティナのピアノの上手な子供の話ですが、この子は自分の学校でピアノを弾かせてもらったことがありません。ある時、地域の催し物の際にピアノを弾くように頼まれたので、一生懸命練習に励んでいました。ところがその鼻先に、突然の断わりの連絡。「1人の子ばかり優遇するのはよくない。」ということでした。この子の演奏に刺激されて、ピアノや音楽に目覚め、興味をもつ同年令の子供が増える可能性を、教育者自らの手でまっ殺しているのです。下を思いやる余り、何かのきっかけを作って全体を上へひき上げることを忘れているのです。

ショパンは純粋なポーランドの血は流れていませんが彼の国家意識は純粋にポーランドのものでした。地理的条件に恵まれている私達日本人の理解を越えた「愛国心」が、彼を支えていたのです。大国に囲まれ、複雑な同盟関係の中でしいたげられる祖国ポーランドに生きた彼は、自分の「国」というものを強く意識するようになるのです。この彼の精神をそのまま受継いで、現在のショパンコンクールはあります。日本の本州と北海道を合わせた程度の面積と、わずか3千余りの人口。ソ連、東独ノ

となっていることを実感したことです。大げさな言い方かもしれませんが、或るフランス人の演奏を目を閉じて聴いていると、まるでフランス語を聴いているような錯覚さえおこしました。また、ドイツ人のを聴きながら、ドイツのオルフ・システムの出発がドイツ語の詩を唱え覚え、フレーズが出来、オスティナートし、その詩にメロディーをのせたものであることを思い出したり…。

○以上のことから、出来るならば早期教育からの国際交流を活発にしたいものだと痛感しました。

3. これからのピアノ教育について

御一緒した音楽評論家野村光一先生へ、前述のことをぶつけてみました。「日本のピアノは一応の水準にきた。これからは根本的なことから音楽を見直さなければ…。日本のピアノ教育は幼児から出直した。」というお言葉。私は目下、この問題と取り組み、次のような研究、実習をしています。

○ソルフェージュ研究 ハンガリーのコダーイメソッドをわらべうたで導入。歌って遊んで、それを音符に結び



ショパン胸像の横で

左より野村光一氏、松口雍子女史

つけていく作業。

○バスティン研究 アメリカのバスティン方式。5指を鍵盤の模様で導入。幼児から長調、短調の移調遊びと音楽の10要素を平行させていくシステム。

○ソビエト方式の研究については、目下検討中です。

私はこれまで世界各国の音楽院を訪れ、メソッド、教材を調べてまいりました。今回、ショパンコンクールに出席し、これからの方向づけがはっきりしたことを意義深く感じております。(松口雍子)

に接し、常に脅かされ痛めつけられる小国が世界に訴えるべき手段、国威誇示の手段、それがこのコンクールなのです。単にショパンを讃えるだけのものではありません。ショパンの愛国心＝ピアノ曲ということをお忘れしないで下さい。このコンクールの入賞順位にも、そういった国家意識が生きています。

今回は、ショパンコンクールとしてのショパンの伝統に対する姿勢を問うハブニングが起きました。ユーゴスラビアから強靱な個性の持ち主が出演。強烈なソナタやマズルカといえないマズルカを演奏し、場内を沸かせました。審査員の意見が両極に分れ、ある審査員の0の採点に対してアルゲリッチが怒りを表明する事態となる程でした。アメリカの審査員リスト氏によると、

「彼はチャイコフスキーコンクールに出るか、マネージャーをみつめて演奏旅行をすべきです。ここはショパンコンクールであり、ショパンの伝統とスタイルを尊重すべき場なのです。この意味で、彼はすでにショパンとはいえない。」これに対しハンガリーの審査員は、「ショパンはすでに世界のものです。伝統やスタイルにこだわる必要はない。」ショパンのピアノ曲はポーランド風なものにとどまらず、日本風、中国風、アメリカ風、カナダ風、ベトナム風、フランス風……どれも良くてどれもよくない、などということはないのです。

話は戻りますが、私は2位の女性の演奏に心を奪われました。テクニクと感性が見事に融合した、1位入賞者よりも1位にふさわしい彼女が2位に甘んじたのも、先に述べた政治的配慮ゆえのことなのです。彼女がソ連人

であることと関係がないとはいえません。ポーランド国民の手前、ソ連を1位にするわけにはいかないのです。ここに、私達には測り知れない歴史と政治がコンクールの中に介在しているのを感じました。

これまでにヨーロッパ、アメリカなど外国に足を運ぶ度、彼らが、自己表現の仕方やその機会をよく心得ているのに感心してきました。今回のポーランド行では、より強烈にそれを感じました。音楽という手段を通じて、言葉や文字にできない事を、ポーランドは主張しているのです。私達日本人は純粋に音楽を愛し、表現します。ピティナのコンペティションに於ても、受験者、出場者は番号で表すなど、あらゆる角度から考えて、公平であることを第一として来ました。ところがワルシャワではこれまでに経験してきたものとは違った意味をもつ音楽の存在を、実感することになってしまいました。

最後にもうひとつ。世界の中でも、ソ連、ポーランド、アメリカの音楽教育に私の関心は向いています。

今回のコンクールの成績からしても、ソ連はピアノ教育に関しては世界1といえます。ところが、ソ連の音楽学校のことを調べてみると、現在は日本からの留学生は受入れていないということです。また、ポーランドにしても、国が貧しく、日本人留学生はピアノ以前の問題、生活の維持に追われる始末で、ここでピアノを学ぶには非常に困難が伴います。現在、アメリカとは深い交流を結んでいるものの、上記の両国の音楽教育を吸収するまでにはしばらく時間が必要とされることが、非常に残念に思われてなりません。(福田靖子 文責 能登)

The Competition

ピアノ教育に再検討を

金子 勝子

国際コンクールが日本で実現し、しかも参加資格者も錚々たるメンバーでした。このコンクールに、ワクワクしながら数回聴きに行った私ですが、日本で行われた国際コンクールへの感概と共に、何かふっ切れない、モヤモヤしたものが心に残りました。何故でしょうか。

また、予選とはいえ、上野文化会館の小ホールの席が比較的空いていたことにも、疑問を感じます。音大生などは、学校を休校してでも聴くべきでしょう。パロックから現代までの演奏様式、特に外人演奏家による演奏等、予選の方が比較的検

討出来るはずです。この様な形で聴くことが、一番説得力を持つ勉強法だと思うのですけれど…。

ところで、残念ながら日本人の演奏は、多くの人が感じたように、表現の仕方がおとなし過ぎるという印象を拭い去ることが出来ませんでした。どうも、音楽が心に強く差し込んでこないのです。

1昨年、アメリカのブリガムヤング国際コンクールを聴いた時には、大きな感銘を受けて参りました。音色の豊かさ、リズム感、緊張感、間の取り方等の鋭さ、躍動感、息継ぎ（フレーズ）の長さ…、全てにおけるスケールの大きさの違いを、嫌という程味わって帰ってきました。

どうしてこの差が生じてしまうのでしょうか。国民性といってしまうえばそれまでですが、確かにそれもあるでしょう。しかし、日本の音楽教育の現状にも、関係があるように思われます。

まず、一番強く感じるのは、これまでのピアノ教育は音楽学校入学、つまり受験向きの演奏から脱しきれていないのではないかという事です。教

日本国際コンクールに思う

真継 豊子

この度、日本にはじめて国際コンクールが生まれたという事は大変意義のある事だと思います。私のように、直接海外に向向いて国際コンクールに接する事の出来ない聴衆にとって、この度の事は何にもまして貴重な事でした。そしてこのコンクールが結果的には色々な問題点を残したとはいえ、一応成功のうちに終わった事も、日本人の1人として、喜ぶべきことであると思います。

しかし、どんなコンクールの会場でも、聴衆にとって、その賞の行方についてはいささかの疑問や不満はつきものようです。このコンクールの場合も賞が発表された時、1位なし、2位はティボーデ、3位なし、そして4位に藤井とケルドンキュフが並び、5位にネーマティと渡辺が並んだ時、私は私なりにこの疑問につき当らざるを得なかったのです。

何故、藤井やケルドンキュフがネーマティや渡辺の上位に並んだのだろう。この2人についてはすでに予選の時、技術面での不足を感じました。ケルドンキュフの音の汚さは、それを補う音楽的な魅力があったとしても、私には頂けないものでした。また、藤井の演奏は平坦で面白味がなく、ひとくちに言ってハートのないもので、この人が本選に残ったという事さえも、何か審査の盲点を

ついた偶然の所産のような気がしていたのです。それに比べると、5位のネーマティは一寸特異なリズム感覚とユニークなセンスの持ち主で、日本人には真似の出来ない雰囲気を感じさせていたし、渡辺はネーマティとは対比的に、堅実でそつがなく、技術で鍛え上げた日本人の典型のような演奏でした。私には、むしろこの両者が4位にくるのが当然のこのように考えられたのです。

2位のティボーデ。これは妥当な線であったと思います。5人の中では、ティボーデはやはり、傑出した存在でした。けれども、このコンクールを高い水準のものとするためには、ティボーデを1位にする事が出来なかったのも当然でしょう。優勝したとはいえ、彼はあまりにも若く、技術も音楽もあられずりで未完成の部分が多く、しかし未完成ゆえに将来への夢と期待が残されて、それが却って大きな魅力にもつながっていたのです。とりもなおさず、1位の空白の席は彼の可能性の部分として、いつの日か彼が、この空白を埋めて再び日本にやって来る事を期待したい気持ちです。

ところで、私は今度の入賞者の中に女性が1人もいなかったという事を、大変淋しく感じました。只1人の力量のある女性として第1次予選から大きく期待していた荻野千里が、三次で消えてしまった事は、何としても惜しい事でした。彼女の存在は、猛獣のような男性群の中にまじると、如何にも繊が細く感じられました。けれども、あれだ

える側も教えられる側も、最終目的をそこへ持って行ってしまっているためそれ向きのレッスンしか受けていないのでは、と思われるのです。入学してからも、ほとんどの音大の先生が、それで良しとしてしまっているのではないのでしょうか。それとも、その時ではすでに遅いのでしょうか。私達のような立場の人間は、その所を一番知りたいたのですが、そうとなれば責任は重大です。よほど腰を据えて、あらゆる角度から検討仕直す必要が有りそうです。

日本では、演奏家向きの教育が欠けているのではないのでしょうか。才能が有り、演奏家に向いていると思われる生徒でも、今の教育では世界の演奏家の仲間入りをするには、大変な苦勞が伴うように思われます。音色・緊張感・間の取り方などは、1対1のレッスンだけで学ぶのは無理です。こういうことは、ホールの大きさ、音の鳴り具合、聴衆の反応等で微妙に違ってくるものです。歌舞伎等の世界に見られるように、才能のある子

けの優れたテクニックと女性のもつ天性の美しさを煮つめあげたような彼女の演奏は、高価な実際の輝きにも似て、とくに第1次予選の彼女を知る人は、誰しも深い感銘を受けたにちがいないと思います。

今度の国際コンクールの本選だけを云々すれば期待はずれの声もやむを得ないでしょう。けれども、私はこのコンクールは、本選の出来ばえやその賞の行方よりも、本選に至るまで、1次・2次・3次と繰り返されていく過程の中で、国際コンクールとしての面目を発揮していたと思います。

連日、場内を埋めつくした聴衆の熱気あふれる拍手と、その中で次々に熱演してゆく各国とどりの奏者たち。舞台と客席とを結ぶこの緊迫感の中で過した幾日かは、私にとっても、緊張と興奮の連続でした。殊に第1次予選などは、参加者の殆どが何処かの国際コンクールの入賞歴をもつというこのコンクールにふさわしく、「一寸ない高い水準の第1次予選」と評された程の、高度な聴きごたえのある予選でした。

それに比べて、本選の幕切れがもう1つ物足りなかったという事。それは審査方法やスケジュールの組み方、曲目の数等、色々な点で問題があったと思います。本選の日、5人の奏者達はすでに連日の奮戦の果てにすでに疲労の色が濃く、かえって、予選で消えていった人の中に、むしろ本選出場に充分たえ得る人材がいたのではないかとい

には、小さい時から舞台を踏ませて会得させていく必要が有りそうです。それだけに、本物の音楽をたくさん聴き、西洋音楽の歴史を勉強することも、非常に大切でしょう。

口幅った言い方になりますが、その辺が勝負になるような気がします。大人になってから、慣れない舞台を踏ませて高度なものを要求しても無理でしょう。

とにかく、日本は西洋音楽の歴史が浅いのですから、まだまだ試行錯誤が必要だと思います。その過程で、色々と非難を浴びたり、失敗も出てくるとは思いますが、それを乗り越えて行くことが、成功につながる道なのではないでしょうか。私達のような立場の人間も、勇気をもって、なお一層の努力をしなくてははいけないと思います。日本の将来のために…。

今後も日本で、どんどん国際コンクールが行われ、すばらしい演奏の出来る人がたくさん現われることを夢みております。(金子勝子)

う末練が、私に残るのです。

最後に、国際コンクールというものを初めて聴いた私の大切な感想を1つ。もう何年も前から云々されて来たことですが、日本人は技術は高く、世界各国のコンクールでも或る線まではゆくのにそれ以上になると壁にぶつかってしまうという事です。その意味を、国際コンクールを目のあたりにして、実感として感じる事が出来ました。日本人の演奏には、おしなべて、ドラマ性、演技性、冒険性といったものが欠けています。構成力による立体感や音の起伏によるデュナーミクも稀薄です。これは一体何に原因があるのでしょうか。長い日本文化の伝統の所産なのか、日本人の生活様式や国民性、あるいは体格の限度からくるものなのか、それとも食べ物のせいなのだろうか。味噌汁の味は、所詮、味噌汁の音楽しか生み出せないのか、などと考えこんでしまったり、いややがては日本人もこの域から脱出して、本当の意味で国際的水準に達し得る演奏者を統出できる日もそう遠くないのではないかと考えてみたり…。私達たち、ピアノ教育にたずさわる者。その力は微々たるものかもしれないけれど、その辺のところからもう一度深く考えてみる必要はないだろうか、賞に対する疑問や不満とは別のところで、考えさせられてしまったのです。(真継豊子)

The Competition



映画“コンペティション”

ピープルアローン“People alone”。映画「コンペティション」のテーマは、この一語にある。

十数年前、戦争や国家権力に対する抗議としての映画や既製の枠組への反抗を描いた映画が、話題を呼んだことがあった。ここで、新しい生き方やファッションが生まれた。そして、もち出された音楽は、若者の連帯と友情を求めるもの、グループサウンド、ロックンロール、フォークソング……と、誰にでもすぐに理解できて、手軽に楽しめるサウンドであった。見つめれば見つめ返す、共感をよび起こす音楽が広がっていき、そのテーマは、愛と自由と平和。

そして時は流れ、世界情勢も変化し世相も移り変わって来た。時代は進み、音楽に対する認識も多種多様に広がり、変化した。楽しむだけの段階を通り過ぎ、次へと進む。そして、今、マスターのためには血のにじむような訓練と精神力、膨大な時間と、特殊な才能が必要とされるピアニストの世界に、スポットライトがあてられることになった。

きめられた枠の中で、与えられた条件に対し、真剣に取り組む人間達の姿。究極的には人は1人で生まれ、1人で死んでいく孤独な魂であり、1個の肉体である。他と競いつつ、同時に自己との激しい闘いが要求されるのが、ピアニストの世界であろう。ピアノコンペティションの舞台をかりて、選択を迫られて生きる人間を描き、一種のコスモポリタニズムを漂わせたこの映画に、同じピアノを志す人々はとくに共感をもたれることであろう。

「私たちが現代の競争社会で生きていく限り『戦い』はどうしても避けられない。私たちは様々な『戦い』に敗れ去ってゆく者に何をしてあげられるだろうか。愛されることよりも、愛することができるだろうか。その答がこの映画の中にある。」この映画の製作者オリアンスキーの言葉である。



Richard Dreyfuss

リチャード・ドレイファス

苦悩のポール・ディー・トリッヒに扮する。「グッバイガール」でアカデミー賞主演男優賞受賞。「アメリカングラフィティ」「ジョーズ」「未知との遭遇」などで好演し、難役をこなす俳優として、確固とした地位を映画界に築いている。



Amy Irving

エイミー・アービング

21才のピアニスト、ハイディを演ずる。舞台演出家の父と女優の母のもとで、少女時代から女優を志してきた。TV出演、「キャリー」「フェーリー」「ふたりだけの微笑」「忍冬の花のように」と一作ごとに演技の幅を広げている。



Lee Remick

リー・レミック

ハイディのピアノ教師グレタ・バンデマン役。16才でブロードウェイの舞台を踏み、その後TVや映画で幅広い役柄を演じ、実力派として注目されている。「長く熱い夜」「酒とバラの日々」「ハイウェイ」「刑事」「わが緑の大地」「オーメン」



Sam Wanamaker

サム・ワナメイカー

高名な指揮者に扮する為、猛練習をしたという。17才でデビュー以来、ラジオ・舞台・映画・TVと活躍し続けている。ブロードウェイでイングリット・バーグマンと共演。監督・演出も手がけている。最近ではTV界中心に仕事をすすめている。

この映画の主人公ポールとハイディは、同じピアノ・コンペティションで“闘う”ライバルであり、愛し合う恋人同志。恋と野望の板ばさみの上、父の病、参加資格の年齢制限の上限の30才である為の精神的プレッシャー、数々の苦悩と苦しい選択を迫られた、ポール。そして若さと才能にあふれたハイディ。この2人が流す涙の味は、喜びの味がするか、悲しみの味がするか。厳粛なる結果を前にして2人は、どう行動するか。あなたなら……？

映画中、演奏されるピアノ協奏曲と実際の演奏者は以下の通り。

指揮 ラロ・シフリン
管弦楽 ロサンジェルス・フィルハーモニック・オーケストラ

サンサーンス ピアノ協奏曲ホ短調 演奏者 ダニエル・ポラーク
ショパン ピアノ協奏曲第1番 ホ短調 演奏者 リンカーン・マヨルカ
プロコフィエフ ピアノ協奏曲第3番 演奏者 ダニエル・ポラーク
ベートーベン ピアノ協奏曲第5番“皇帝” 演奏者 チェスター・B・スピアトフスキー

ダニエル・ポラーク氏からのメッセージ

この映画は、アーティスト、音楽の教師・生徒だけでなく、一般の方々にも衝撃をもたらし、すばらしいメッセージをもたらしております。一般の方々もピアノ界の厳しさ、戦いを見て、この映画を楽しんで下さると確信しています。…中略…実際、映画の始めから終わりまで流れるテーマソング“人々は孤独 (People are alone)”は最優秀音楽賞としてアカデミー賞にノミネートされ、また編集部門でも特別にノミネートされています。皆様、お気づきになると思いますが、映画の中でピアニスト役の俳優の演奏する姿が、全身写しだされていますが、俳優の手を見ていると、彼自身がピアノを弾いているかのように見えます。もちろん、実際は私達、何人かのピアニストにより何人もの違ったピアニストが弾いているかのように、サウンドトラックが作られたのです。私は、優勝曲である、プロコフィエフ No.3をラロ・シ

フリン指揮のロサンジェルス・フィルと協演し、またリスト・コンチェルトホ短調とサンサーンス・コンチェルトホ短調も弾きました。私たち、担当のピアニストは、実際のピアノコンクールでいろいろなピアニストが違った奏法で弾い



▲ダニエル・ポラーク氏

ているように、聞こえるような工夫をしました。

私は映画ができて上がっていないほんの初期の頃から、そして今、皆様が御覧になる完成した段階に到るまで、その成長課程を見守ってきましたが、この映画の主題はすばらしく、私にとって貴重な問

キャスト

ポール・ディートリッヒ…リチャード・ドレイファス
ハイディ・スクーノバー…エイミー・アービング
グレッタ・バンデマン…リー・エミック
アンドルー・スースキン…サム・ワナメイカー
ジェリー・ティサルボ…ジョゼフ・カリ
マイケル・ハンフリーズ…タイ・ヘンダーソン
タチアナ・バラノバ…ビッキー・クリーグラー

スタッフ

製作総指揮…ハワード・バイン
製作…ウィリアム・サックハイム
監督…ジョエル・オリアンスキー
脚本…同上、ウィリアム・サックハイム
音楽監督…ラロ・シフリン

題提起をしています。クラシック音楽に真剣に取りくむ姿勢を讃美しているこの映画は、その場面がとともよく描かれています。

1人のピアニストを舞台に上げるためには、個人の努力だけでなく、それを育てる先生の苦勞はいかなるものか—その舞台裏でなされるたいへんな努力—プロ意識、精神力の鍛練、そういうことすべてが、私たちピアニストを音楽界に送り出し、私たちが音楽を始めた主たるゆえん「音楽を楽しむ心」を教えてくれるのです。時として私たちは、その音楽を喜びとすることを忘れがちです。この映画は音楽の偉大なる力と愛を、広く一般の人々に見せてくれます。そしてまた、音楽と何の関係のない人達にも大いに楽しんでいただけることと確信しております。この映画の中で表現しようと思つたこと(主題)は、忘れえぬ思い出となって、私達の心に残るでしょう。

(訳 渡辺)